

「1910 年代、日本キリスト教界における朝鮮統治に対する言説の公共的性格の研究」

研究代表者 松本周（宮城学院女子大学 一般教育部）

研究概要

本研究では 1910 年代の日本キリスト教界における、日本の朝鮮統治に対する諸言説を主対象として分析する。特にそれらの言説成立の背景に観察される人的ネットワークと「上毛教界月報」「福音新報」等の機関紙上への掲載に注目することにより、公共的性格を分析しようとするものである。第二世界大戦終結以前における日本キリスト教界のアジア認識については、広く知られた「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書簡」（1944 年）へと至る、国家の侵略政策への協力的側面が強調される。

しかしながら今回の研究で焦点を当てる 1910 年代において、一方で朝鮮総督府から援助を受けた日本組会教会の朝鮮伝道が行われ、他方では前述の伝道への反対意見、「105 人事件」裁判への批判、「三・一独立運動」への朝鮮総督府および軍の取り扱いに対する批判とりわけ「堤岩里事件」の告発などがキリスト教界から発信された。日本の朝鮮統治をめぐるこうした批判的言論は、先行研究で植村正久・吉野作造・柏木義円らに関する研究の中で論及されている。

先行研究が基本的に個人の思想研究の枠組みに留まっている地平を超えて、本研究ではネットワークに注目し研究を進めたいと考えた。

研究実施内容

研究助成開始と時を合わせたように、2022年11月26日(土)に国際基督教大学アジア文化研究所主催、国際基督教大学キリスト教と文化研究所共催、JFE21世紀財団協賛によるワークショップが開催された。発表は「台湾のキリスト教にみる東アジアの近代化、植民地化、民主化の動き」藤野陽平(北海道大学准教授)、「民国期中国人クリスチャンの日本イメージ」金丸裕一(立命館大学教授)、「柏木義円らのキリスト教的公共意識—国家政策への異議申し立て—」松本周(宮城学院女子大学准教授)、「香港と中国大陸におけるキリスト教—民主化運動との関係から—」松谷暉介(金城学院大学准教授)であった。

同ワークショップにおける発表で強調した一つは、キリスト教の「公共」意識である。日本社会では、キリスト教はじめ宗教が取り扱うのは人間の心・精神的な領域であり、社会活動は宗教とは疎遠ないし無関係であるとの通俗的見解に接することが多い。そして宗教と社会との関係がメディア等で取り上げられる場合には、宗教の「反社会的性格」が注目される場合である。近年では「宗教の社会貢献」等に関する研究が複数発表されるようになってきてはいるが、前述した認識は社会全般になお根強い。

しかしながら日本キリスト教史で、第二次世界大戦前・戦中のキリスト者言動に注目するならば、そこに社会への発信や社会形成使命の自覚すなわち「公共」意識の存在を観察することができる。とりわけ日本国家によるアジア各地の植民地化が進行していたこの時代にあって、本研究課題で対象とするようなキリスト者たちの公共意識は結果的に、国家政策への「異議申し立て」としての性格を強く帯びるものであったことを指摘した。

ワークショップの質疑応答においては、報告におけるキリスト者日本人らの公共意識と佐幕派武士としての出自との関係性についての質問があるなど、学びとその後の

研究への示唆を受けることができた。また、JFE21世紀財団協賛でワークショップが実施されたところにも表れているように、当日発表者の全員が JFE21 世紀財団大学助成「アジア歴史研究助成」を受けており、それぞれの研究課題と計画や進捗について聞き合い、意見交換できた点でも有意義なときであった。

本研究課題の遂行にあたってまずは吉野作造と柏木義円の二人に関する資料探索・所在確認・入手可能な資料の収集を実施した。大崎市の指定管理者 特定非営利活動法人 古川学人 吉野作造記念館スタッフの方々に多大なご協力をいただき、『吉野作造全集』中の朝鮮論の掲載箇所一覧などの情報を得ることができた。そして同館所蔵資料と発行物、紹介を受けた資料を通じて、吉野作造と柏木義円や海老名弾正との交流の具体的な状況、また吉野がキリスト教と出会う最初のきっかけともなった押川方義との接点などを確認することができた。

さらに同志社大学人文科学研究所で保存され資料目録が発行されている、『海老名弾正資料』、『柏木義円資料』、『湯浅与三資料』の中から本研究課題に関連する日本組合教会の「朝鮮伝道関係」諸資料、「組合協会理事会議事録」を閲覧し、朝鮮伝道の発議から実施に至るまでの過程を史料から辿ることができた。併せて、柏木義円が編集発行に中心的な役割を果たした機関紙「上毛教界月報」の発送・購読者関係資料にもアクセスすることができた。同紙掲載内容については柏木執筆の文章を中心に複数の先行研究が所在する。それと比して送先・購読者については注目されてこなかったが、今回調査した資料からたとえば山室軍平が購読していることなど、読者層の広がりを確認することができた。加えて組合教会の朝鮮伝道を中心に推進した渡瀬常吉について、具体的な活動や役割を資料から確認することができた。この渡瀬についての分析は、後述する新たな渡瀬執筆史料の発見へとつながった。加えて、この資料収集時には、日本キリスト教史を研究している同志社女子大学の山下智子教授から、明治・

大正期のキリスト者の人的つながりの事柄を中心に研究上のアドバイスを受けることができた。

以上の資料収集とその内容分析を経て、研究計画時に想定していた植村正久より以上に、押川方義が本研究課題との関わりにおいて研究上の興味深い位置にあることが了解されてきた。植村と押川はいずれも日本キリスト教史の三大源流の一つである「横浜バンド」のメンバーである。押川は宣教師 J. H. バラが初秋祈祷会で祈った「神よ、わが日本を救い給え」と日本を思う熱い祈りに心を打たれたことがきっかけとなり、キリスト教の洗礼を受けた。ここにはキリスト教信仰が個人の救いであると共に「国」を救うことであるとの意識が観察される。さらにこの一連は「切支丹禁制高札」撤去前の出来事であり、押川は日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会（後の横浜海岸教会）創設メンバーとなった。

押川は牧師となるべく学び、キリスト教伝道を志して新潟へ赴いた。しかしながら新潟を襲った大火によってその計画を断念し、同道していた吉田亀太郎ゆかりの石巻を新たな伝道地と考えて東北へ向かう。石巻への途上で仙台の地が有する可能性に注目し、結果的に仙台で教会および牧師養成の仙台神学校（現東北学院）および女子教育の学校として宮城女学校（現宮城学院）を設立した。この仙台の地で先述したように、押川の講演を聞いた吉野作造がキリスト教へ入信することになり、両者の接点が生じた。押川のキリスト教入信と東北での活動、彼の言として知られる「東北を日本のスコットランドに」の有する意味について、拙論「宮城学院と「初週祈祷会」——押川方義を介して」（宮城学院資料室年俸『信・望・愛』第 28 号、2023 年 3 月）に記した。

その後に押川は朝鮮半島での教育事業、具体的には「京城学堂」に関わるようになる。そしてこの学校への関わりを通じて、押川と渡瀬常吉との間に交流が生じる。同

じプロテスタント・キリスト教に属するものの、押川は横浜バンドに与する改革長老派教会系であり、渡瀬は海老名弾正に師事し組合教会の系譜へ連なる。その両者が教派を超えて親密な交流のあったことは注目に値する。このように押川は、一方で朝鮮総督府の機密費を受領して伝道を推し進めた渡瀬と緊密な連絡を持ち、他方でこうした組合教会の朝鮮伝道のあり方を柏木義円らと共に批判した吉野作造とも接点があるという点において、興味深い存在である。なお押川研究における困難さは本人がほとんどまとまった著作を残していないことを含め、資料の探索およびアクセスが限定的になることである。本研究課題実施の中で、精力的に押川関係の資料探索と収集に努めたものの、未だ押川の思想とりわけ朝鮮認識を再構成するに至るには資料が乏しい。今後の課題としてさらなる資料収集に励むこととしたい。

そして吉野作造については、組合教会の朝鮮伝道への反対活動や大正デモクラシー期の「民本主義」提唱などの姿勢と、数多い朝鮮籍や中国籍の人々との交友関係が関連し合い、1923年の関東大震災時に発生した朝鮮人虐殺問題を追究する吉野のあり方にも継続していったことが確認された。本研究期間中に関東大震災から百年目となる2023年があったことで、多くの施設で関東大震災に関連したプログラムが開催され、豊富な資料にアクセスすることができた。

これまでの記述の中で、1910年代における日本統治下の朝鮮に関わり、そうした状況下での日本組合教会朝鮮伝道への賛成／反対の立場を表明してきたキリスト者たちの名を多く挙げてきた。本研究課題に沿って収集した資料でそれらの人名を度重ねて読み取る中で、それぞれの人物には政治的・社会的見解の相違が存するにもかかわらず、登場人物のほぼすべてと交流を保持していた存在が浮かび上がってきた。それは徳富蘇峰である。日本初期キリスト教の三大源流の一つである熊本バンドの一員であり、同志社英学校に学び、ジャーナリストとして活躍した。本稿で登場する人物の大

半は徳富蘇峰と書簡の往来があり、蘇峰宛の手紙類は公益財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団 徳富蘇峰記念館において整理保存されている。本研究課題の資料収集の一環として同館を訪れ、所蔵目録に掲載されている本研究関係人物の書簡を閲覧・複写することができた。

収集した資料は同館の発行物を含め膨大な量であり、すべてを解析することはまだできていないが、先に述べたように渡瀬常吉から蘇峰に宛てた書簡の中に貴重な史料が含まれていた。同館には渡瀬常吉から徳富蘇峰宛の書簡が 14 通保管されている。多くは直筆の書簡であるが、内 1 通のみ内容物が謄写版印刷物（小冊子）2 種であった。この印刷物の発行者はいずれも大東亜基督教研究会（会長渡瀬常吉）であり著者はどちらも渡瀬常吉である。一冊は『旧きよめ教會の兄姉に呈する書』、もう一冊は『皇国中心主義と基督教』と題された小冊子であった。国立国会図書館データベースで検索した渡瀬常吉著書の中に上記二つの登録はなかった。また国立情報学研究所データベース CiNii に拠ると、西南学院大学図書館および東京大学図書館には『続 皇国中心主義と基督教』と題する冊子が所蔵されている。大学図書館相互貸借サービスにより、西南学院大学図書館蔵の現物を確認したが、徳富蘇峰記念館所蔵のものとは頁数・内容が異なっていた。記述内容から徳富蘇峰記念館所蔵冊子が正編（第一巻）であり、西南学院大学所蔵冊子が続編（第二巻）と理解される。以上の調査確認から、徳富蘇峰記念館所蔵の二小冊子は高い確度において、これまで存在が確認されていなかった史料であると考えられる。

二冊のうち『旧きよめ教會の兄姉に呈する書』について、2024 年 9 月 3 日（火）に関西学院大学を会場として開催された日本基督教学会第 72 回学術大会において研究発表を行った。その要点を以下に記したい。渡瀬はきよめ教會の指導者であった牧師の中田重治の思想批判を展開している。渡瀬の主張の中心にあるものは「ユダヤ人のメシ

ヤ思想」拒否である。キリストの王権思想は、本来的にはキリスト教信仰また神学に内在するもので神学的に問題になる者ではないのであるが、渡瀬はそれを「ユダヤ人のメシヤ思想」であって「耶蘇のメシヤ思想」ではないとし、自身の考えるキリスト教思想から切断し除外する。この小冊子における渡瀬の主張の核心は、王なるキリストという理解を根本的に拒否することであった。

渡瀬が上述の主張を展開することには、次のような目的のあったことが理解される。それは日本の国体とキリスト教を融合させるにあたって、イエス・キリストが王として支配するというキリスト教教理が障害となるからであった。換言すれば、渡瀬が述べる「一路皇室中心」である「本質的日本基督教」とは、「イエス・キリストは王である」という信仰告白を放棄したところに成立する思想であった。なお「本質的日本基督教」という表現は、渡瀬自身の意識では「本質的」な「日本基督教」ではなく、「日本基督教」こそが「本質的基督教」であるとの認識になる。こうした思想が、第二次世界大戦中に多くのキリスト者から発された、日本的基督教の一つの形であった。

そして本研究課題を通して明らかになったことは、第二次世界大戦中にいわば極限化した形で表れた思想は、時局や国家の状況へ対応するという応急的形態ではなく、本研究課題の出発点であった 1910 年代においてすでに各人へ内在していた思想が、やがてより具現化されていったものであるという事実であった。

研究期間において到達した上記結論に加えて、今後の課題について述べたい。まずもっとも直接的には、今回の研究の中で発見された渡瀬常吉史料についての分析を論文化して発表すること、また吉野作造についても今回収集した一次資料・二次資料を活用して、1910 年代から 1920 年代にかけての言動とその現代的意義について社会倫理的視点で研究し論文にまとめていく。この両者に関する研究に、押川方義、海老名弾正、徳富蘇峰らとの交流を考察していくことで、この時代のキリスト者たちの言説

における公共的性格について、現代的視点も含めて再構成していくことを目指したいと考えている。

以上に名を挙げた人物以外にも、同時代人で交流があり、主題的にも重なり合う人々が何人か存在する。具体的に例示すれば、内村鑑三、賀川豊彦、渋沢栄一、孫文らである。研究期間中にもいくばくかの調査や資料収集を行ったが、主題的な研究としてこの期間内に展開することはかなわなかった。さらに述べれば、これらの人物との交流も視野に入れて研究していくことは魅力的であるが、同時に各人について専門的な先行研究も数多く存在している。そうした事情をふまえると、この研究課題への取り組みは共同研究においてこそ実りあるものとなることが考えられ、そうした構想も検討していきたい。

また、資料保存の課題についても触れておきたい。今回の主要研究対象者の中で、柏木義円や吉野作造については比較的まとまった資料が入手しやすく、先行研究も豊富であった。それに対して、押川方義や渡瀬常吉については資料が乏しく、資料収集以前に資料探索が研究遂行にあたって大きな比重を占めた。特に渡瀬については、研究期間の後半に入ってから、徳富蘇峰記念館や諸キリスト教会に所蔵されている可能性を見出し、現地に赴いての資料探索を行うことで資料を入手することができた。このことをふまえると、本研究課題に関連してくる研究テーマの場合、日本全国にあるキリスト教会とりわけ第二次世界大戦以前からの歴史がある諸教会には、研究視点からすれば「埋没」している資料が数多く所在している可能性は多くあり、それらを探索していく作業が重要であることを認識した。また元来は所在していたであろう資料が戦時の空襲による焼失や、建物の解体・新築時に史料的价值が理解されず処分されてしまった場合もある。戦前戦中の貴重な資料がこの先に処分されてしまうことを防ぐためには、そのことを自覚している研究者たちが連携して資料の探索と保存や保管

についての方策を講じていく必要がある。それがこの分野の研究に求められている重要な課題の一つであることも、今後の課題として覚えておきたい。

本研究課題の遂行にあたり、とりわけ広範囲で豊富な資料の収集、それに伴う出張調査研究、書籍等購入、研究成果公表の学会参加などが可能となったのは JFE21 世紀財団による研究への尊い理解と厚い支援によるものである。ここに記して深い感謝を申し上げる次第である。